

高齢グラウンドゴルフプレーヤーの語り（その1）

A Study on Narratives of Old Ground Golf Players : part 1

富川拓・炭谷将史・多胡陽介

Tomikawa Taku, Sumiya Masashi, Tago Yousuke

要 約

本稿では地域の高齢グラウンドゴルフプレーヤーに対しライフストーリー・インタビューを実施し、「運動・スポーツ」「健康」「地域」と関連する語りからその生活世界の一部を明らかにした。また地域での運動会やゴルフ・グラウンドゴルフの活動を通じた社会的ネットワークの構築や、競技に打ち込む高齢者の実態が確認された。

Key Words : グラウンドゴルフ, ライフストーリー, 運動, 健康, アクティブ・エイジング, QOL

1. 問題の所在

1.1 中高齢者の多様な生活実態

現在、日本では国民医療費が増加の一途を辿っており、高齢化がその一因であると言われている。また急速な高齢化や生活習慣の変化により、疾病構造にも変化が現れている。疾病全体に占める生活習慣病の割合が増加し、これら生活習慣病に掛る医療費は、国民医療費の約3割にも及んでいる（健康日本21中間評価作業チーム 2006）。

このような危機的状況の中、医療・福祉の分野においては中高齢者の客観的健康に関する研究が従来から活発に行われている。しかし、アクティブ・エイジングの実現やQOL（quality of life）の向上に影響すると考えられる主観的健康をも視野に入れた中高齢者の研究はまだ緒に就いたところと言えよう。

中高齢者、特に高齢者は同質的に捉えられがちであるが、実際は同一コーホート（同一出生年齢の世代）における個々のライフコースやライフスタイル、意識や健康度などには個々人のバラツキが大きく、社会老年学では高齢者のエイジングの多様性の抽出とそれが生み出される諸要因を明らかにすることが研究において主眼となり、生活の多様性が重要な論点になっている（前田 2006）。

そこで本稿では、まず多様化する高齢者の生活の実態を明らかにすることに主眼を置いた。身体を動かし文字通りアクティブな活動をしている高齢グラウンドゴルフプレーヤー個々人はどのような生活世界に生きているのだろうか。そこには主観的健康、アクティブ・エイジングの実現やQOLの向上に繋がる社会・文化・歴史的諸要因が見られるはずである。高齢者は日々の活動にどのような意味づけを行い、活動にアクティブに参加しているのだろうか。

このような観点から「地域における高齢グラウンドゴルフプレーヤーの生活世界を明らかにする」というリサーチクエスチョン（以下RQとする）を設定した。このRQに基づき、本稿ではまず地域の高齢者に「運動・スポーツ」「健康」「地域」を軸としてライフストーリーを語っていただきデータを得ることとした。

ライフストーリーは、一般的に、個人が歩んできた自分の人生についての物語である。人は自分の人生を最初から最後まで完全に語ることはできないため、自分の人生で意味があると思っていることについて選択的に語ることになる（山田 2005）。本稿ではインフォーマント自身が「運動・スポーツ」「健康」「地域」に関連すると考えるトピックを選択的に語ることになる。

2. 方法

2.1 分析対象

聖泉大学わくわくクラブ会員の鈴木さん（仮名）を対象とした。聖泉大学わくわくクラブとは聖泉大学が提供する会員制のスポーツクラブである。大

学はグラウンドゴルフ場・フットサルコート・テニスコートなどを所有しており、会員はそれぞれのスポーツを楽しんでいる。

筆者は聖泉大学のわくわくクラブ担当事務職員の協力のもと、平成19年7月28日（土）に開催された聖泉わくわくクラブ主催グラウンドゴルフ大会に赴き研究協力者を募った。そうしたところ、鈴木さんの快諾を得ることができた。結果と考察で示す通り、鈴木さんのライフストーリーは非常に多岐に亘る豊かで興味深いものであった。そこで本稿では鈴木さん一人の語りに焦点を当て分析を行った。

鈴木さんの基本属性は以下の通りである。

- ①昭和6年生まれ。調査時は75才であった。男性。
- ②彦根市A町在住。
- ③妻、長男夫婦、長男夫婦の孫2人と同居中。
- ④現在無職。転職を1回経験。製造業からホテル勤務に。

2.2 手続き

実施場所は聖泉大学4階の407教室とした。事前のアポイントメントの際、鈴木さんが心地よく語ることのできる場所をお聞きしたところ、普段からグラウンドゴルフで馴染みのある聖泉大学を希望された。

実施日時は2007年8月6日（月）の9時からであった。実際のインタビューは9時5分から10時40分までである。インフォーマントは鈴木さんお一人、インタビュアーは2名であった。

インタビューは半構造化インタビューの形式を採った。インタビュアーは事前に打ち合わせを行い、リサーチクエスチョンに基づき質問をしていった。

2.3 トランスクリプトで使用した記号

トランスクリプトでは鈴木さんを「S」、インタビュアーは「*」と「**」で表記している。使用した記号は以下の通りである。

トランスクリプションで使用した記号

(<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> の西阪の整理をもとに富川が作成)

1. 重なり

[複数の話者の発する音声为重なり始めている時点は、角括弧（ [）によって示される。

2. 聞き取り困難

() 聞き取り不可能な個所は、() で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。

3. 沈黙・間合い

(数字) 音声途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ1秒ごとに()内に示される。

4. 笑い

h hで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。

5. 補足

() 補足する場合は()の中で示す。

6. 注記

(()) 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。

3. 結果と考察

鈴木さんのライフストーリーには「戦争体験」、地域での「運動」「健康」「人間関係」などに関するトピックが見られた。まず初めに鈴木さんが生まれ育った地域に関する語りから見ていく。

3.1 町の変化, 実家の職業

鈴木さんはA町に第2次世界大戦前の昭和6年に生まれ、現在もA町に住まわれている。小さい頃、家は農業を営んでいた。

近所の工場が近代化されて大きくなっていったこと、道路がよくなっていたことが語られた。

*：農家。

S：だ。

*：当時は、家族総出で。

S：そう。そういうことですね。はい。（3）えーほりやつらかったこと。やっぱ労働は厳しいで。それはありましたけども。今と、比較すると。楽はできるけれどお金の方は大変ですし。

3.2 戦争体験、幼少時代の遊び

第2次世界大戦前の昭和6年生まれの鈴木さんだが、その幼少時代は戦争の影響を色濃く受けていた。まず食べ物に関する苦労が語られた。鈴木さんの家は農家だったがそれでも米がなかった。また塩が無く、静岡まで米を持って家の人買い出しに行ったこともあった。終戦は今の中学1年生くらいに迎える。

①食糧難

S：農家であっても米がなかった。ていう厳しい時がありましたでね。食べるもんがないということで。今でも我慢ができる。こん時の(1)経験がね。いきてるんかな。

S：今でも辛抱できますよってよいいますけどね。甘いもんとかそういうものは一切。

②グラウンドがイモ畑に。パンエイの思い出。

*：なにかこう遊びの中で運動とかされてました？

S：ちょうど高学年になった当時はもうグラウンドがイモ畑になっていたんでね。運動会ちゅうもんはぜんぜんなかったんで。

S：で、地域で遊んでいるいうても、パンエイするとかね。

戦争の影響でグラウンドがイモ畑になり、運動会がなかったそうである。また冬場の遊びとして「パンエイ」を挙げていた。「パンエイ」とは所謂メンコである。また田んぼでの走りごっこ（鬼ごっこ）もしていた。現在でも田

んぼが多いこの地域ならではの遊びであろう。グラウンドが無いので、収穫が終わって水が無くなった田んぼが遊び場になるのである。

③校門歩哨

S：それは小学校出てくると校門があって、ここで、いちど、あれは、週番ちゅうのが、まあ6年生が何人かやっとしてね。

**：週番。

S：4人ほどのグループの中であの校門のところに、どういうのかな。ちょっとした人が入れるくらいのあれ。そこで、A,A村(現在のA町)何名ただいまあの、参りました、よし、いうてね。

**：はい。

S：そういう点呼ちゅうのかね。もう軍隊的な。そういうことがずうっと、戦前は続いていました。

S：週番制で。校門歩哨(こうもんほしょう)ちゅうたんかな。一番えらい人でね。きれいにこう、ま、来ない、集団で来ないやつは、ほな、もう一度やりなおせ、という権限を。

*：へえ。

S：よし！ちゅうなもんで

戦争の影響は「校門歩哨」といった制度にも見うけられた。6年生が当番制(週番)で校門に立ち、点呼をした。「歩哨」とは軍隊用語で「警備にあたることや、そのような任務にあたる兵」を指す。

④空襲警報、防空壕

空襲警報、防空壕の語りでは近所に軍需工場があったため、授業中に警報が鳴って帰宅した経験が語られた。また防空壕は人が入るものと、日常必要なものを入れておくものの2つが自宅にあったそうである。

3.3 青年団での野球

鈴木さんは地域での活動として運動・スポーツに親しんできた。語りには町対抗で競ったスポーツ大会に関するものが多く見られた。以下の語りは青年団での野球に関するものである。

S:私ら(野球を)やりかけた時は、もう17,8ぐらいうちやったやろか。まあ、中では一番まだ、こまかかった(若かった)と思うんですが、年齢的に。野球と卓球大会がもう定例ちゅうか。年間の行事でやってましたね。ほれ皆。青年団活動いうのでね。

** : うん。それは年齢はちいちゃい子から大きい子まで。

S : ほんで年齢は青年団ですので、あの、あの当時でいうと、中学から25歳までですかね。はい。

* : 男性だけ。

S : そうですね。

野球は戦後になってからのものである。年一回、青年団の野球大会が開かれた。町対抗のトーナメント戦である。同様に卓球も戦後になってから一時的に地域の活動として盛んになったようである。

この野球大会は家族総出で応援をする賑やかなイベントであり、優勝するために夕方5時から毎日練習をしたそうである。鈴木さんの語りには「練習」「努力」という言葉がこの後も頻繁に現れる。

また婦人部のバレーボール大会も開かれていた。既婚女性が対象であるが、息子が結婚して家にお嫁さんが来ると、大会からは引退となる。この大会には年齢制限は無いが、大体55歳くらいで引退するようである。未婚の女性は応援をする側に回る。

3.4 運動会

青年団や婦人会の大会の後、今度は各町の運動会が始まった。ここでの運

動会は町対抗ではなく、組対抗となる。またこの町の運動会とは別に、彦根市B地域（A町もこの中に含まれる）の市民体育大会としての運動会が開かれている。この運動会は町対抗である。市民体育大会の運営は体育指導員が行う。

①市民体育大会（町対抗運動会）

*：それは盛り上がりますね。

S：もう、はい

*：うん。

S：はい。もう炊き出しで全部にぎりめしで。うちら近いし全部応援に行く。まあ、テントみな張らありますさかいにね。8月のもういつも暑い最中でしたんで。

*：盆前、盆の後。

S：8月のだいたい最後の日曜日ぐらいでしたかね。今もう、それでは駄目やと、健康的に。いうことでひと月遅らして去年くらいから。はい。変更されました。

運動会で鈴木さんの記憶に残っている種目は「玉入れ」や「対町リレー」であった。また選考会やお揃いのTシャツ、お祝いの盆踊りに関する語りが見られた。

玉入れは自治会長がアンカーとなる。最後まで入らない場合は恥をかくため籠を傾けたこともあるという。また玉入れの練習は家でバケツをぶらさげてしていた。野球と同様に熱心に練習したとの語りが見られた。

また運動会にはA町全員が背番号の入った黄色のTシャツを着て参加する。誰が見てもA町の選手であると一目でわかったそうだ。

②総合優勝とお祝いの盆踊り

*：それだけ練習もして、で優勝なんかしたときにはすごい盛り上がりが。

S：そうです。はい。で、間違いが起こったっていうか総合優勝ちゅうのがありますね。で、お祝いであれ盆踊りかなんか、しましたね。総合いうともうずーっと年間の行事トータルしてトップちゅうことですので。

③運動会のメイン種目，対町リレー。

S：で、リレーでいっぺん優勝したちゅうことがほれが奇跡やったちゅうか。

＊，＊＊：ふーん。

S：まあもうやっぱりあの運動会のメインはもう、たい、対町リレーですもんね。

対町リレーとは町対抗の6人リレーのことである。これにかけている町は町内で先に選考会を行い、成績の良い人を選抜して出してくるそうである。

④総合優勝の決め方。さまざまなスポーツの大会

この地域では運動会だけではなく、さまざまなスポーツの大会を開催しポイントを争っていることが明らかとなった。年間の総合優勝はこのポイントの合計で決まることになる。ソフトボール（以前は野球）、ビーチバレー（以前はバレーボール）、マラソン、卓球などの種目で争われる。なおソフトボールは男性のみの競技である。

また運動会で行われる対町リレーは特別なものとして考えられており、別途対町リレーのみでポイントが加算される仕組みになっている。これだけの大会が年間を通して開催されているため、地域のまとまりが出てくる、と鈴木さんは語っている。

⑤本番に向けての練習

鈴木さんは本番に向けての練習に非常に力を入れたようである。対抗戦と

いう仕組みもその一因であろう。地域への帰属意識が高く、良い成績を出すために努力を重ねる姿が語りに見受けられた。

玉入れは半月前から練習し、輪投げは自転車のタイヤを利用した練習を行っていた。全員がそのような練習をしていたわけではない。鈴木さんの語りにある「納得がいかないから」という言葉が一つのキーワードであろうか。

S：ほんなん皆がやってはらへんやろうけど、私はもうなんかに出よう
と思ったら必ず、さ、自分で。

**：ほんほんほんほん。

S：先やっとかんと。納得いかんさかいに。はい。

3.5 ゴルフ

鈴木さんがこのような地域での運動・スポーツとともに特に力を入れて取り組んでいたのがゴルフである。2度目の会社の雰囲気や、上司がゴルフ好きであったことも、当時庶民には縁のなかったスポーツに鈴木さんが打ち込めた要因の一つであろう。

ゴルフは昭和48年くらいから始めた。本人はこの時期を「早かった」と表現している。実際この時期に町内でゴルフをしていたのは鈴木さん一人だったそうである。また昭和62年には町内のゴルフコンペを立ち上げている。

①会社の上司の存在

S：わしも連れてっててもらたのが、あのう上司でしたんでね。ほの人に、
ほうぼうに連れて行ってもらった。

*, **：ほ一ん。

S：まあほの人うまいことほのう割引券とか、あの利口な、券を持って
はりますんですわ。で、ほの人に連れてってもらって。で有名など
こぼっかり行ってましたね。

S：で、我々の給料でほんなどこ行けるようなどこ違うんですけどうま

く恵まれて大事にしてもろて。

②ゴルフでも「努力」「練習」。アプローチ練習は仏間で

ゴルフにおいても鈴木さんは努力し練習を重ねてきた。その練習方法はユニークなものばかりである。アイアンの練習は田んぼの株を飛ばしたり、街灯の下にマットをひいて素振りをしたりしたそうである。お風呂では手を開いたり閉じたりして握力の強化に努めた。またアプローチは以下のような方法で練習したそうである。

S：で、家の中では、うち、大きかったんでね。家が。

**：うん。

S：八畳三つありましたんでね。で仏間のところへ座敷テーブル置いて。で大きい布団を夜具をほこへ被せて。で端から。アプローチの練習。でガラスも何枚か hh。

*：へー。

③ゴルフの魅力

ゴルフは鈴木さんが今まで経験してきたスポーツの中で一番楽しいスポーツであった。とりきり戦でもらった大きな優勝カップについて話す際は非常に嬉しそうな様子であった。「集中」「自分との戦い」「何もかも忘れられる」「ストレス解消」といったゴルフの魅力が語られた。

ア) 集中、自分との戦い

S：こんな楽しいことをなんでせんにやろうなと思ってやっぱり。これは思いましたわ。

S：よおあんなあほみたいなことやっとな、と、こう、せん人はそういうこと言わはりますわね。ちっちゃいボール飛ばして、何が面白いの、ということやけど。

S：これはほんまに集中力ですやん。自分との戦い。

イ) 何もかも忘れられる，ストレス解消

S：なんもかんも忘れてやれる，一日やってられるちゅうのは。やっぱりゴルフにはね。醍醐味が。はあ。と，ストレス解消にも。ほんとに。ほらすばらしいと思います。（8）

S：そのあたりがゴルフの魅力。

3.6 ウォーキング

鈴木さんは健康のためにゴルフやグラウンドゴルフ以外の運動にも親しんでいる。ウォーキングがそれである。平成7，8年くらいから奥さんと一緒に歩き始めた。普通は夕方に30分くらいであるが，一日休んだ場合は少し距離を延ばすそうである。歩くのはいつも大体集落の周りである。同じ時間帯に歩いている友達が何人かいるようである。

3.7 グラウンドゴルフ

ゴルフを止めてグラウンドゴルフへと移行したのは平成13年くらいのことである。鈴木さんが70才くらいのことであった。以下の語りの中に移行の理由が若干ではあるが現れている。

①ゴルフからグラウンドゴルフに移行した理由

S：ほれまではやっぱりゴルフに楽しんでましたし。（4）

S：ほれあれはほんでもやっぱり健康にはねえ。まあ，あのグリーン上
がってからはストレスが出，出たりするで，ちょ心臓に悪いときも
hhhh，ありますけども。

②初めはあほらしかった

S：まあやってみようかと思ったのが。いっぺんやってみてこんなんあほ

らしてやってられんなあ、というふうなことがもう、すぐほうゆうふうに感じたんですけどね。

**：は一ん。

S：頼りない、ちゅうんですかね。やっぱり。

S：けど、ほんなことゆうててもやっぱりやってみたらまた面白なるんちゃうかなと思って。で、ほの時はB地域（A町も含まれる地域）のレッドクラブ（仮名）いうクラブに。

③町内初のグラウンドゴルフプレーヤー

老人クラブでグラウンドゴルフをしたときに、A町では誰もしていないことが分ったため始めたようである。地域と関連させてスポーツに取り組む姿がそこに見られる。最初は聖泉大学をホームグラウンドとするA町のレッドクラブに所属していたが、次々と他のクラブにも誘われて、現在は近隣3町のメンバーからなるブルークラブ（仮名）と彦根のイエロークラブ（仮名）にも同時に所属している。

④グラウンドゴルフを始めたきっかけ

S：たまたま老人クラブで（グラウンドゴルフを）したときに、A町だけが誰もグラウンドゴルフしてへんな、と、言われて。ほなやろかちゅうふうなことがきっかけでしたんかなあ。

S：老人クラブ。

S：はい。B地域（A町も含まれる地域）、あのう、（3）B地域の老人クラブ。

*：そこで、ええ、グラウンドゴルフが町内から出ていなかったと。

S：はい。ほんで、まあほれだいかい（大会）してはったんかね。年一回。A（町）は全然せえへんなあ、ちゅうな話で。

S：ほれがきっかけで入ってますわ。ほいで一人だけ誘うて、A町として二人だけが入って。

⑤広がる人間関係

S：やっぱり、彦根行ってから人との繋がりっちゅう全然知らん方との、繋がりっちゅうのがやっぱり。はい。親睦っちゅうのかねえ。いろんな方とまあお友達になって。ほれ以上に良かったなど。いうふう
に今感じてます。

S：好きなことやって。また色んなお友達ができて。これは良かったなあ、ゆうて家内も。私行くところ全部連れて行きますさかいに。はい。
(1)

**：最初グラウンドゴルフ始めた頃はやってられないみたいな気持ちが
あったと思うんですけど、やっぱり人との繋がり。

S：そうです。それがあるんでねえ。

鈴木さんはグラウンドゴルフにより従来のA町やB地域の枠を超えた人間関係を築くことができた。3つのクラブに所属して多くの友人を得ることができた。「人との繋がり」がグラウンドゴルフをする大きな要因として考えられる。またクラブでは年一回の親睦旅行を行っており、それも楽しみの一つとなっている。旅行先はグラウンドゴルフができる福井の複合レジャー施設である。

⑥クラブ会長の仕事

鈴木さんは積極的にクラブの会長の仕事を引き受けてきた。誰かがやらないと前に進まない、という考え方である。以前には自治会と老人会の会長経験もあるということだった。昔からリーダーの仕事を引き受けて皆を引っ張ってきたという自覚を持っておられるようだった。

S：でえ、結構頼まれれば嫌とゆえへんさかいに、どこいってももう会長やったり hhhhh。もう順番にすませてきましたけどね。

**：ふーん。(2)

S: まあほれも誰かがやっぱり、やらんことにはほの会の運営は成り立ちませんのでね。

⑦グラウンドゴルフと健康

練習のためには時間通りに動かなければならない。その張り詰めた雰囲気
が健康に良いと思われているようだ。

S: 明後日はまた何時に行かんならん。そういうことでやっぱり家にじ
っとしてるとよりは。張り詰めた、何も役をしてなくてもやっぱりそ
ういうふうなことで。役立ってるんじゃないかな。まあ一つのボケ
防止ちゅうか。

⑧ホームグラウンドで負けたくない

ここでは同じ地域からの参加者の少なさを寂しく思う語りが見られた。ま
たこれまでと同様に、勝つための「努力」と「練習」の大切さをここでも繰
り返し語っている。

S: で、B地域が、B地域が12人や。寂しいですわ。(聖泉大学で開か
れた大会でB地域からの参加者が少なかった)(2)

S: もうちょっとなんとかかね。来ても負けるさかいつてなもんか。やっ
ぱり地元のホームグラウンドです。

*, ** : ふーん。

S: もっと負けんように頑張ったらええんにゃ、ちゅうて。

S, *, ** : hhhhh。

S: 私に言わしたらね。

S: ほりゃやっぱり自分なりにやらなほんなもん。練習だけ行ってて、
ほんでだいかい(大会)だけ出たっただほんなもん。この間の人なん
かどんな努力してやあるわからへんで、ちゅうて私らもようゆうん

です。（（すばらしいスコアで大会優勝した人に関する話））

4. まとめと今後の課題

語りの中に多く見られたのは、健康のために運動・スポーツをするというよりも、「負けたくない」という思いで努力し練習する鈴木さんの姿であった。高齢者であっても、運動・スポーツにおいて親睦だけではない真剣勝負を展開していることが確認された。

また同時に地域と密接に関連する活動として運動・スポーツに親しんでいることが語りから明らかになった。運動・スポーツに関する活動を含めた鈴木さんの生活世界は、地域やそこでの人間関係と切り離して考えることができないだろう。今後の調査では地域での運動会の詳細や鈴木さんを始めとする地域の高齢者が具体的にどのような社会的ネットワーク・パーソナルネットワークを築いているのか、またゴルフからグラウンドゴルフへの移行がどのようになされたのか、などといった点を明らかにしていきたい。

参考文献

1. 健康日本21ホームページ
http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/ugoki/kaigi/pdf/0704hyouka_tyukan.pdf 2007.11.26取得
2. 西阪仰のホームページ
<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> 2007.12.16取得
3. 前田信彦, 2006, 『アクティブ・エイジングの社会学』 ミネルヴァ書房
4. 山田富秋, 2005, 『ライフストーリーの社会学』 北樹出版

付 記

本稿は平成19年度私立大学等経常費補助金特別補助 地域共同研究支援の助成による研究成果である。